小説 竹内けん
挿絵 ここあ／Hiviki N

ハーレムマーチャント

Harlem Merchant

立ち読み版

ハーレムシリーズの世界

グリンカムビ
ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
ベリージャム
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エバーグリーン
エクスター
ラグナイト
レヴィ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
ガラテイア
カーリング
ヒューリアス
パロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ピーナス
樹海
メリシャント
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

登場人物紹介

ナオシ

ムスラン商会の跡取り。ラルフィント王国に負けない陶器で事業を拡大させようと計画中。

デミミュラー

ナオシとは幼少期からの知り合い。類い稀なる陶器造りの才能で彼から多大な投資を受けている。生活能力のほうは皆無といっていい。

ハーレムマーチャント
Harlem Merchant

ショウシ
ムスラン商会で働く真面目な少女。ナオシの妹マガリとも仲良し。料理が上手く女子力も高い、恋には直球勝負の乙女。
ワドリーテ
ヒルクルスの補佐役で彼のためならなんでもできるほど惚れている。ただしヒルクルスのほうは彼女にあまり興味がなさそう。

第一章　御用商人　009
第二章　死の商人　045
第三章　妹扱いはイヤです　079
第四章　燃える城下町　117
第五章　泡沫の夢　152
第六章　名人位　195
ハーレムキャッスル外伝　一途な少女　241

「は、は、はい……き、ききき気持ち、いいです。はぅ、こんなの初めて」
「自分ではここに触れないの？」
ナオシのぶしつけな質問に、ショウシは恥ずかしそうに応じる。
「わたし、そこらあたりを触るの怖くて、なんかビリビリするから……」
「それでパンツを穿いたまま角で押していたんですか？」
「は、はい。で、でも、信じてもらえないかもしれませんが、ああいうことやったのは、今夜が初めてです。いつもはナオシ様のことを思い浮かべるだけで、お腹の中がキュンッてなって、パンツ濡れちゃうんです」
その通りだとすると、実に敏感な娘である。
「信じますよ。その代わり、今後、オナニーしたら駄目ですよ。恋人がオナニーしている、というのは男としていささか寂しいですからね。エッチしたくなったら、わたしのところにきなさい。ショウシの性欲は、わたしがきっちりと処理してあげますからね」
「は、はい……よろしくお願いします」
女の急所を集中的に弄られて、ショウシはピクンピクンとしながら頷いた。
頃合いを見計らって、包皮を剥く。
「はぅ……」
真っ赤な陰核の周囲には、白いチーズのような恥垢がぴっちりと付着している。
清純派な乙女ほど、陰部に触れることを嫌がるから、どうしてもいろいろと不潔な状態

になってしまうのだ。
（こんな状態を、ショウシが見たらショックを受けるな）
ショウシの心理を慮ったナオシは、そっと指先で剥き出しの陰核の周りを拭ってやる。
「あぁぁぁ……」
初剥きされた敏感な粘膜に触れられて、ショウシはピクピクと痙攣を繰り返す。
その儚いまでの美しさに魅せられたナオシは舌を伸ばし、ショウシの媚粘膜に下ろした。
「そ、そこ汚い……」
「ショウシの身体に汚いところなんてありませんよ。とっても美味しいです」
嘯いたナオシは、処女臭の薫る陰唇を丁寧に舐めしゃぶる。
剥き出しの陰核はもちろん、襞肉の一枚一枚をまさぐり、裏の裏まで舐め清めた。
「はぅ、ああ、ひぃ、ひぃ、ひぃああ……そ、そんな、そんなところまで、ああ、ああ、ああああん♪」
羞恥に悶絶しながらも、それが快感となって全身を駆け抜けるようだ。ショウシの身体は、まるで電流でも走っているかのように、ビックンビクンと痙攣している。
もしかしたら、これがイキっぱなし、という状態なのかもしれない。
ナオシのテクニックというよりも、長年恋焦がれてきた異性に触れられて、身体中が性感帯として花開いてしまっているのだろう。
「あ、あぁ……そこ、そんなふうに、ナオシ様に舐められるなんて、恥ずかしい、恥ずか

しいのに気持ちよすぎるぅぅぅ」
はぅ、はぅ。
熱い吐息を上げて喘ぐショウシは、口角から涎を垂らしてしまっている。
プシュッ！
ナオシの鼻先で、ゆばりが上がった。
「っ⁉」
さすがに驚いたナオシは、いったん口を離す。
ジョジョジョジョ――――ッ！
「はぅ、わたし、こんなときに、こんなときに、ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」
蟹股開きのまま放尿を止められないショウシは、パンツを握ったまま顔を覆う。
「気にすることありません。潮噴きですよ。かわいいショウシのおしっこなら飲んであげることだって厭いませんよ」
持参したハンカチで顔を拭く。
やがて放尿が止まり、ショウシが落ち着いたところで、ナオシは次の段階に移ることにした。
「そろそろいいかな？」
ナオシはズボンの中から逸物を取り出した。

「キャッ」
ギンギンに反り返った異性の生殖器に気づいたショウシは、かわいらしい悲鳴を上げて、反射的にパンツを握った両手で顔を覆ったが、布地と指の狭間からしっかり観察している。
ナオシと目があってしまって、ショウシはパツが悪そうに口を開く。
「ナ、ナオシ様のお大事、その……思っていたよりも、ずっと大きくて、少し怖いけど、素敵です♪」
「そ、そう……入れるけどいいですか？」
「は、はい。当然です。わたし、ナオシ様になら、なにをされてもいいです」
ショウシの言い分にいささか、違和感を覚えて促す。
「なにされてもって……具体的には？」
「え、わたしもよくわからないですけど、アナルでも受け入れる覚悟はできています。野外でやられたり、仕事中にエッチなことされたり、裸で夜の街を連れまわされたり、いろいろエッチな調教されちゃうって」
すらすらと出てきたショウシの言葉に、ナオシのほうが絶句する。
「いや、大事なショウシにそんなひどいことはしないよ……」
「そ、そうなんですか？　男の人はみんなこういうことをやりたがるって」
安堵の溜息をもらしたショウシだが、どこか残念そうな顔をする。
（まったく、ショウシは意外と耳年魔だったんだな。まさかマガリとそういう話で盛り上

がっていたりするのか）
　表向き純情そのものに見えた少女たちの裏の顔にいささか戦慄しながらも、いきり立つ逸物を、乙女の秘門に添える。
「まぁ、ショウシが望むのなら、これからいっぱいエッチな調教をしてあげるけど、今日はまず処女をいただこうか。何事も順番だからね」
「はい。わたしを大人にしてください。ナオシ様に初めてをもらっていただくのが夢でした」
「ショウシはいちいち大げさだな。それでは、いくよ」
　ナオシが逸物で押し入ろうとすると、ショーツを握りしめたショウシは両目を固く閉じ、膣穴もぎゅっと閉めたようだ。そのため弾かれる。
「そんなに固く閉められたら入れられないよ」
「ご、ごめんなさい」
　とはいえ、緊張するな、というほうが無理であろう。ナオシは優しく促す。
「力を抜いてリラックスするんだ」
「はい！」
　思いっきり力んだ声で、ショウシは返事をする。とはいえ仕方ないので、ナオシはそのまま逸物を進めた。
「ひぃ、痛い……」

「我慢して」

自ら望んだ破瓜とはいえ、痛いものは痛いのだろう。

ショウシは尺取虫のように上に逃げようとする。俗にいう「処女のずり上がり」というやつである。

そんなことを何度も繰り返しているうちに、いささかじれったくなったナオシは、ショウシの膝の裏を持つと、ショウシの顔の左右に押さえつけてしまった。

身体を二つ折りにされたショウシは、もう身動きが取れない。

この体勢でナオシは、焦らしに焦らされた逸物を有無を言わさず、力任せに押し込んだ。

ブッツン！

「ひいいいいいいい」

乙女のたった一枚しかない大事な膜が突き破られた。

入口さえ突破してしまえば、あとは道なりだ。狭い隧道を押し開きつつ進み、ついには最深部にまで押し入った。

ドスン！

未開の地に初めて鍬を入れられて、開拓された乙女は、まるで釣り上げられた魚のようにピクピクと痙攣している。

「痛かったね、ごめん」

「……」

ショウシは声もなく、閉じた両目の端からツーと涙を流した。
熱い膣洞が、ギュッと逸物をネジ切らんばかりに締めてくる。
締まりすぎで痛いほどだ。ワドリーテのほうが柔らかく、やわやわと締めてきて、楽しめた。
（それにすごいザラザラの肉壁だ。これが初物喰いってやつか）
喩えて言うならば、ワドリーテは女としての完成品だった。八百屋で売られているような、見た目にも美しく、食べれば甘い。食べごろの果実だ。
一方でショウシはまだまだ青い果実である。これからじっくりと手をかけて、甘い果実に熟成させなければならないだろう。
（ショウシはこれから、わたしが極上の女に育ててやる）
そんな男としての野望が、ナオシの胸の奥に沸々と湧き上がる。
「ショウシ、見てごらん。わたしのおちんちんが身体の中にズッポリと入っている」
「はい。嬉しいです……」
破瓜の痛みに耐えながらも、なんとか目を開けたショウシは頷く。
「これでショウシはわたしの女だね」
「はい。身も心もすべて捧げます」
ショウシの健気な宣誓に、ナオシは頷く。
「それじゃ抜くよ」

「え？　なぜ……」
「痛いでしょ」
ナオシの言葉に、ショウシは首を横に振るう。
「ヤダ、中にください」
「無理をすることはないよ」
「だって……ナオシ様の精液欲しいです」
涙目で懇願してくる表情がかわいすぎて困る。
「仕方ないな。我慢できなかったら言うんだよ」
「はい」
痛くても我慢するつもりなんだな、ということは伝わってきたが、ナオシとてもはや我慢がきかない。
獣欲に支配されて、滾る逸物をズコズコと掘削させる。
「はぅ、すごい、オマ〇コが拡げられて、奥がズンズン突かれる」
快感というよりも、驚愕なのだろう。初めての体感に、ショウシは目を剥いて惚ける。
ナオシがいくら激しく腰を使っても、泣き言はいわない。
（まったくすごく痛いのだろうに、無茶をする。しかし、わたしに貫かれるのがそんなに嬉しいのか）
破瓜の痛みに苦悶する少女を絶頂させることは不可能だろう。一刻も早く苦痛から解放

してやるには、射精するしかない。
そう見極めたナオシは、素早く射精するために素早く腰を使い、そして、最深部で放った。
ドビュ！　ドビュ！　ドビュッ！
「はぅぅぅぅぅ」
生まれて初めて膣内射精をされた乙女は、高く翳した両足を痙攣させ、下腹部を激しく脈打たせた。
そして、心行くまで射精して小さくなった逸物を引き抜く。
「大丈夫？」
「はい。お腹の中が温かいです。ナオシ様の子種の感触なんですよね。はぅ、すごい……幸せです……」
ショウシは中に入ったものを出してしまうのがもったいない、というかのように、パンツを握りしめたままの両手で股間を押さえる。
「はぁ、はぁ、はぁ……あの……おちんちん、触らせてもらっていいですか？」
「あ、ああ……いいですよ」
射精したばかりの逸物は、できたら触らせたくないものだが、ここはショウシの希望を優先させることにした。
ナオシは椅子に腰を下ろすと股を開いた。机から降りたショウシは、男の膝の間に跪き、

半萎えの逸物を愛しげに口に含む。
チュポ、ジュルジュルジュル……。
精液と愛液と破瓜の血で穢れた状態である。決して美味しいものではないだろうに、ショウシは実に美味しそうに舐めしゃぶった。
それからいったん口を離し、顔を上げる。
「わたし、ナオシ様のお大事をこうやって口に含むのが夢だったんです。ほんと、エッチな女の子でごめんなさい」
「いや、かわいいよ。ショウシが望むなら、好きなだけしゃぶりなさい」
ナオシはショウシのピンク色の頭髪を撫でてやる。
「はぅ……ありがとうございます」
再び逸物を口に含んだショウシは鼻を鳴らしながら逸物を吸引する。その下半身の亀裂からは、ドプドプドプ……赤い血の混じった白濁液が大量にあふれ、床を汚した。
そんな光景を見下ろしたナオシは、妹のように思っていた従業員に手を出してしまったことを、いまさらのように後悔していた。

「ちょ、ちょっとどこ触っているのよ。そこは汚いでしょ！」
なんとショウシが、ワドリーテのお尻の穴に触れたようだ。怒られたショウシは戸惑ったように応じる。
「大人の女の人は、アナルでもセックスを楽しむって聞きました」
「それは大人の女ではなく、変態女よっ!!!」
本気で怒られてショウシは肩を落とす。見かねたナオシが口を挟む。
「そう気を荒げないで。しかし、ワドリーテ。あなた、アナルを弄られていたとき、キュンキュンといい具合に締まっていましたよ」
「……」
ワドリーテは恨みがましい顔で睨んでくる。
「いい機会です。やってみますか？」
「えっ？」
「あなたまだアナルの体験はないのでしょ。新しいことをすることによって、生まれ変わった気分になれるかもしれない」
それから背後のショウシに命じる。
「ということで、ショウシ。まずはワドリーテのお尻の穴を解して差し上げなさい」
「はい。ナオシ様のご指示なら喜んで」
ショウシは喜々として頷く。

ナオシはショウシが悪戯しやすいように、対面座位のまま寝台の縁に移動して、両足を床に下ろして腰をかける。そして、両手でワドリーテの尻を左右から掴み、ぐっと割ってやった。

「はぁ？」

女。いや、人間にとって、最も秘すべき場所を開かれて、ワドリーテは目を剥いて、ナオシにしがみつく。

ショウシは床におり、ナオシの股の間に入ると、ワドリーテのお尻に顔を入れて、肛門をペロペロと舐め始めた。

「やめて、そこは、駄目、ああ、おお……」

情夫に逸物でぶち抜かれた状態で、年下の娘に肛門を舐められたワドリーテは、まるで凍えているかのように震えた。

「おお、すごいですね。オマ〇コの中がキュンキュンと動いています。ワドリーテ、嫌がっていたわりに、アナルで感じているみたいじゃないですか？」

「そ、そんなことは……ああ♪」

どんなに頭で拒否しても、身体が喜んでいることは、逸物からよく伝わってくる。

「ショウシ、指をいれてみなさい」

「ちょちょっと、それはダメ。やめて！」

「はい。承知しました」

ナオシとワドリーテの意見。ショウシがどちらを優先させるかなど自明のことだ。
ズボッ！
「はがぁぁぁ！」
どうやら、右手の人差し指を一本、ワドリーテの肛門に入れたようだ。
知的なお姉さまが、両目を見開き、涙を流し、大口を開けて、涎を垂らす。
「そのままよーく解して差し上げなさい」
「はい。あ、ここ、薄い肉壁の向こうに、ナオシ様のおちんちんを感じられます」
ピクピクピクピク！
膣洞と直腸の狭間の肉壁を弄られたワドリーテは、ナオシにしがみついたまま、痙攣を繰り返している。
「どうだい、ショウシ。ワドリーテの肛門はほぐれてきたかい？」
「はい。だいぶ柔らかくなってきました」
「わたしのおちんちんは入りそうかい？」
ナオシの質問に、ショウシは小首を傾げながら答える。
「それは……、たぶん、大丈夫だと思います」
「それじゃやってみようか。ワドリーテの生まれ変わりの儀式」
「いや、それはダメ、お尻なんて無理よ」
怯えたワドリーテは涙ながらに訴える。

「あなたはわたしのものだ、ということを身体に刻んであげるよ」
ナオシは逸物を軸として、ワドリーテの身体を右回りに反転させると、その両太腿を抱えて、M字開脚の状態にして結合を解いた。
愛液に濡れた逸物が野外に出る。
「ちょ、ちょっと、冗談でしょ」
ワドリーテは逃げようと暴れるが、すでに腰が抜けていて満足な抵抗はできない。
それをいいことに肛門に添える。ショウシは心得たように、両手でナオシの逸物を押さえてくれた。
「そのまま腰を落としてください」
ショウシの指示に従って腕の力を抜くと、ワドリーテの自重で逸物は沈んでいく。
ズボッ！
肛門は処女といえども、膜のような邪魔ものはない。そのため一気に根元まで入ってしまった。
「うほぉ」
お洒落でスタイリッシュなお姉さまも、アナルを初掘された状態では恰好つけてもいられないようだ。
目から涙、口から涎、鼻から鼻水まで出てしまっている。
だれもが認める「いい女」が、台無しだ。

（くっ、これがアナルセックスか）
入れ心地の良さという意味なら膣洞のほうが断然に気持ちいい。肛門は入口が痛いほどに締まるだけで、膣洞のようなやわやわとした男を楽しませる締め付けがない。
しかし、ワドリーテの最後のフロンティアを奪ったことで、自分の女だ、という烙印を押したような気分となり、異様な興奮がこみあげてくる。
思わず太腿を抱えた両腕を上下させる。
ズズズズ……。
「ああ、駄目、こんなの……ひぃひぃ……」
引き抜くと肛門が取れてしまうのではないか、と思えるほどに伸びる。
女にもアナルセックスの快感というのはあるだろうが、それ以上に背徳感が大きいようだ。
排泄というのは、女に限らず人間にとってもってもプライベートな行為だ。
アナルにものを入れられて、出し入れされるというのは、その排泄感覚を強制的に体験させられる状態だ。
教育が行き届いた社会性のある女ほどに耐えがたい体験であろう。
「うわ、すごいです。ワドリーテさんのオマ〇コ、すっごい物欲しいそうにパクパクと開閉しています」
さらに股の下にはショウシがワクワク顔で陣取って見物しているのだ。

ワドリーテにとって耐えがたい恥辱であろう。
「ああ、そこダメ、やめて、ああ、いやぁぁぁ」
好奇心を抑えかねたショウシが、ワドリーテの陰唇に悪戯を始める。
「このオマ〇コはすごいです。ふわふわでトロトロで、わたしが指を入れただけでも、すっごい気持ちいいオマ〇コなんだってわかります」
先ほどとは逆。今度は肛門に逸物をぶち込まれ、膣穴に少女の指を入れられて悪戯される。
「あん、アナルに入れられるなんて、すっごく屈辱なのに……ああ、この屈辱感がいいぃぃぃ」
ついにプライドが快感によって砕かれたようだ。
零れんばかりの色気を持つスタイリッシュな美女が、いまや見る影もなく、牝豚状態だ。
「それはよかった。ようやく素直になりましたね。どうです、わたしの下で働く気になりましたか」
「ええ、いいわ。あなたの女になる。あなたの傍にいる。それでいいんでしょ」
「それではダメです！」
断固として拒否したのは、ショウシだ。
「こういうときには、思いっきり淫らに告白するべきだと思います」
ナオシは肩を竦める。

「だそうだ。わたしも聞きたいな。思いっきり淫らやつを、大きな声で」
「わかったわよ。言えば、いいんでしょ、言えば」
肛門を穿かれて自棄になったワドリーテは叫ぶ。
「ナオシのおちんちんが好き！　傍に居させて！　おちんぽの奴隷として、これからずっと傍に居させてちょうだい！」
「うん、いいですよ。これからあなたはずっとわたしのものだ。それじゃ、そろそろ出しますよ」
「いっ、ちょっと、そこに出すの？　そこはダメ、いや、ヤダ、あああ！」
腸内に出されることにワドリーテは怯えたが、いまさらナオシは止まらない。欲望の赴くままに思いっきり射精した。
ドビュ！　ドビュッ！　ドビビビ!!!
「ああ～ん」
肛門内で射精される。それは喩えていえば、浣腸されるような体験であろう。
ワドリーテは絶望の表情を浮かべる。
「うふふ、かわいいです」
かぷっ！
悶絶する淑女の陰核を、ショウシは甘噛みした。
「もう、らめぇぇぇ～～～♪」

ナオシとしても、デミミュラーを人間国宝として、名人位を認めさせるのは大変な仕事だった。

それが報われた日に、こうして愛する女三人と接吻を楽しむなど感無量である。

恍惚としていると、女たちの手が自然と、ナオシの股間に集まってきた。

女たちの手が競うようにして、ズボンの中からいきり立つ逸物を引っ張り出し、肉幹を扱いたり、肉袋の中の睾丸を揉み込んだり、先端を弄ったりする。

いずれもナオシとは幾度となく肌を合わせている恋人たちだ。その手技指技は堂に入っている。

やがてデミミュラーが接吻を外した。

「顔は草食系なのに、おちんちんだけは肉食系だな。女三人を同時に喰えるということで、やる気満々だ」

「いや、まぁ……そうなんだが……」

バツが悪く感じたナオシは、所在なく頬を掻く。

「ここにいる三人の女は、おまえに惚れているという点では同じなのだ。いまさら取り繕っても仕方あるまい。たっぷりとご奉仕してやるぞ、ご主人様♪」

言葉とは裏腹にデミミュラーのダークレッドの瞳には、今日の仕返しをしてやる、と語っている。

「お、おう……」

萎縮するナオシの前で、デミュラーはドレスの胸元を肌蹴させた。
あらわとなった美乳を、両手で揉みながら舌なめずりをする。
「こいつは澄ました顔をして、実はおっぱい大好き野郎なんだ。あたしのおっぱいに挟まれるのが大好きなんだ」
「そうね。わたくしもパイズリは得意よ。若旦那に仕込まれたからね」
ワドリーテもまた、衣装の胸元を肌蹴た。熟れた豊乳があらわとなる。
「ほぉ～」
デミミュラーがチラリと、ワドリーテの乳房を見る。それを察したのだろうワドリーテはわざとらしく両腕を上げて、自らの乳房を誇示しつつ、チラリとデミミュラーの乳房を見る。
二人の間に、一瞬、目に見えない火花が散った。
女という生き物は、例外なくナルシストの気があると言われている。まして、二人ともだれもが認める美貌を誇るのだ。
同じ男と付き合っている女として意識しないはずがない。
そんな微妙な雰囲気を能天気な感嘆の声で打ち破ったのはショウシだ。
「おお、お二人ともでっかいです♪　すごく綺麗で羨ましい」
「そうだな」
ナオシも見比べてしまった。

どちらも女性美として完璧な乳房である。年齢の差か、若干、ワドリーテのほうが大きく重量感があるため、柔らかく型崩れしているが、それで魅力が損なわれるようなものではない。柔らかさはそれ自体が魅力だ。

もちろん、デミミュラーの陶器のようにスベスベで盛り上がった乳房も、男を悩殺する凶器だ。

いずれも素晴らしい乳房であることは議論の余地もなく、甲乙などつけられるものではない。

美乳をさらしたまま、デミミュラーはダークレッドの長髪をさらっと払う。

「ならば二人で挟んでみるか」

「いいわね。おっぱい対決ってわけね」

ワドリーテはにやりと笑って受けて立つ。

かくして、椅子に座ったナオシの右手にデミミュラーが跪き、左手にワドリーテが跪いた。

そして、二人とも自慢の乳房を持ち上げると、いきり立つ逸物を左右からサンドイッチにした。

「おお」

極上乳房による押し競(くら)まんじゅうを受けて、ナオシは感嘆の声を上げる。

ナオシにとってのパイズリ初体験は、デミミュラーであったが、その後、ワドリーテに

もやらせている。
二人と床を共にするときには、定番性戯となってしまっていた。
つまり、二人ともパイズリのテクニックを十分に会得している。
その熟練した女の技を二倍で受けるのだ。ナオシは悶絶する。
「あの……わたしはどうしたらいいでしょうか？」
年上の二人の美女に比べると、まだまだ成長途中であるショウシは、とてもこのタイミングで乳房を出す勇気はないようだ。困った顔で佇んでいる。
苦笑したデミミュラーが促す。
「おまえはおちんちん咥えるのが好きなんだろ。なら、ここにきて先端を舐めればいいじゃないか」
「はい。フェラチオなら得意です。お任せください」
喜々として宣言したショウシは、デミミュラーとワドリーテの乳房の間、ナオシの正面に屈みこむと、合計四つの乳房から飛び出した赤黒い逸物の先端を、ペロペロと舐めだした。
「ぐっ……」
プルンプルンとした極上の乳肉に肉幹を揉まれながらの、先端舐めである。
ダブルパイズリの視覚的な効果は素晴らしいし、柔肉に包まれる感触はまさに極楽だが、それがすなわち射精欲求に直結するわけではない。しかし、先端舐めは違った。

特にショウシのフェラチオテクニックは、好きこそものの上手なれ、という言葉通り。極悪なレベルに達している。
フェラチオに関するテクニックのみ言えば、間違いなく三人の中で一番上手い。
しかも、お姉さまたちに対する対抗心からだろう。凄まじい絶技を披露している。
鈴口の裏にある一本の縦襞を高速で、左右に舐めまわした。
(気持ちいい。すごく気持ちいいが、ここですぐに出したのでは男が廃る)
いまさら見栄を張るような関係ではないのだが、恋人三人を同時に相手にするということで、改めて見栄を張らなくてはならない、と考えてしまうのが、男という生き物の悲しさだ。
「どうだ、気持ちいいか?」
「ああ」
ナオシが認めると、デミミュラーは命じる。
「できるだけ我慢しろよ」
デミミュラーに言われるまでもない。この幸福を少しでも長く味わおうと、ナオシは必死に我慢した。
パイズリしながらナオシの顔を見ているワドリーテが舌なめずりをする。
「射精を我慢している男の顔って、そそるわね」
たまらないと言いたげに腰をくねらせながら、ワドリーテは夢中になって乳房を上下さ

せた。
コリコリに硬く尖った乳首が、亀頭部の鰓を刺激してくる。
「おお、も、もう……」
断末魔の悲鳴を上げるナオシに、さながら陶器を作るときのような精緻な動きで、乳房を操っていたデミミュラーが睨む。
「もう出そうなのか？」
「ああ」
「そうか、ならそろそろだな」
不意にデミミュラーはパイズリをやめた。
「えっ」
驚くナオシたちの見守る中、デミミュラーは立ち上がり、両手をスカートの中に入れると、スルスルとショーツを下ろした。
そして、皆が見守るなか、そのショーツを軽く指先で回したあと、いきり立つ逸物に回して、根元をぐいっと縛り上げられる。
「あぐっ」
射精寸前で刺激を中断された挙句、予想外のことをされたナオシは恐る恐るデミミュラーに確認をする。
「あの……これはなんの真似ですか？」

縛り上げられてギンギンになっている逸物を見下ろして戸惑うナオシに、乳房を出したままノーパンになったデミミュラーはニヤリと笑って嘯く。
「先ほど女王様から習ったんだ。男は射精させないで弄ぶのがよい。射精の寸前でこうしてやると男なんて赤子も同然だとな」
「お、おお……」
それは喩えて言えば、水中にもぐって息を止めていた。そして、水面に顔を出そうと、上昇していったところで、いきなり足を引っ張られて止められたような感覚だ。
逸物は射精したくて、ビクンビクンと波打っているのに、根元を物理的に締められているから出したくとも出せない。
そのもどかしさにナオシは悶絶する。
「さすがは女王陛下ってところかしら。男の扱いも並じゃないわ」
パイズリをやめたワドリーテも感嘆の声を上げる。
「ちょっとかわいそうな気がするんですけど……」
ショウシの言葉を、デミミュラーは鼻で笑う。
「気にするな。この程度で死にやしない」
「そうですね」
デミミュラーの言に、ショウシはあっさり頷く。
「いや、いやいやいや、死にはしないかもしれないが、これは……」

ギンギンにいきり立つ逸物を持て余してかつてない余裕のない声を上げるナオシを、デミミュラーはあっさり無視する。
「さて、続きは寝台でやるぞ」
立ち上がったデミミュラーは、一同をごく当たり前に促す。
行き場のなくなった欲望を持て余し、ナオシが逸物に手を伸ばそうとすると、すかさず叱責が飛ぶ。
「ああ、それから女王陛下からありがたい言葉を賜った。もしナオシが勝手にそれを解いたら、謀反人として投獄してくれるそうだぞ」
「そんな無茶な……」
おそらく、女王グロリアーナは冗談を言ったのだろうということはわかるが、ここで自分勝手に解く勇気はなかった。
ギンギンに勃起した逸物を持て余しながら、ナオシは椅子から立ち上がり、命じられるがままに、寝台の中央に仰向けになった。
その周りに三人の女たちが侍る。
「あらあら、せっかくのいい男も、こうなっちゃうと哀れね」
ワドリーテは右手の中指で、ピンと逸物の先端を弾く。
「うわ、おちんちんすごいです。ピッキピキになっていますよ」
ショウシは恐る恐るといった感じで、肉幹を扱く。

そして、仰向けのナオシの顔の上から、口の端を釣り上げた凶悪な表情のデミミュラーがのぞき込む。
「ここからが本番だ。よくも今日はあたしをたばかってくれたな」
「もしかして怒っている？」
言わずもがなのことを質問してしまったナオシに、デミミュラーは吐き捨てる。
「当たり前だ。おまえには感謝しているが、物には限度というものがある。ちゃんと話してくれればあたしだって大人だ。逃げやしない。それなのにこんな騙し討ち。本日は女王陛下から教わったテクニックを使って、徹底的に絞り上げるから覚悟しろよ」
「あらあら、女を怒らせると怖いわよ」
ニヤニヤ笑いながら、ワドリーテが追従してくる。
「わたしは、ナオシ様を責めるのは本意ではないのですが……」
おろおろしているショウシに、ナオシが声をかける。
「構わないよ。今はそのおっかないお姉さんに従いなさい」
「ナオシ様がそうおっしゃるのでしたら、はい。頑張ります」
ナオシは覚悟を決めた。デミミュラーのためなら何でもする、と決めているのだ。彼女のやりたいようにすることに異存はない。
「ということで、こいつは射精できない。よっておちんちんが萎えることもない。皆で、順番で楽しませてもらおう」

そう嘯いたデミミュラーは、縛り上げられた逸物の上に跨ると、腰を下ろしてきた。
ズボリと、逸物は飲み込まれる。
「くっ」
射精したくともできない逸物を騎乗位で食われて、ナオシは悶絶する。
さらにデミミュラーは、周りの女たちに声をかけた。
「おまえらも協力してもらうぞ。ショウシは顔に跨ってやれ、ワドリーテは腹。ナオシはショウシにクンニしながら、ワドリーテのおっぱいを揉む」
「ちょ、ちょっと待て、おまえ、それは鬼だろ」
「なにを言う、女のほうからハーレムプレイをさせてやると言っているんだ。感謝こそされ、恨まれるいわれはないぞ」
デミミュラーの正論に、ナオシは言葉もない。
「うふふ、それじゃ失礼して」
「ナオシ様、お願いします」
人間国宝の指示に従って、ワドリーテは腹に跨り、ショウシは顔に跨ってきた。ナオシは目の前の一番幼い陰唇を舐めながら、両手を上げてワドリーテの豊かな乳房を揉む。
「はぅ、気持ちいいです」
「はぁ、若旦那って、おっぱい揉むのも上手だわ」
ワドリーテの恍惚とした感想に、騎乗位で腰を振るいながらデミミュラーが口を開く。

「そいつはおっぱい好きだからな。仕事しているときにまでいきなり揉んで来たりするからまいる」
「あら、自慢？」
ワドリーテにまぜっかえされたデミミュラーはむすっとした顔で答える。
「純粋に邪魔だ。こいつがこんなスケベ猿だとは思わなかった。おまえらがいてくれてよかったと思っている。あたし一人で相手をしていたら、どうなっていたか、想像するとぞっとする。とても仕事にならんだろうからな」
「それはよかったわ。正室公認の愛人ってことでこれからは遠慮なく楽しめるわね」
「ワドリーテさんは全然遠慮してなかったと思います」
顔面騎乗しているショウシがまぜっかえす。くんずほぐれず楽しみながら、一人の男を愛する女同士、友情のようなものが芽生えているようだ。
「うふふ、そうね。今のわたくしにとって、この人だけが生き甲斐だからね」
旧主ヒルクルスの安全を遠くから祈るしかない身。彼女に隠れて、その旧主を追い詰めているナオシとしては、心が痛む。しかし、生涯、彼女を騙すつもりである。
「ハーレムセックスというと、やっぱり、マガリちゃんは、王太子殿下と毎日、こういうことをしているんでしょうか？」
ショウシは不思議そうに首を傾げるが、それに答えられる者がいるはずもない。
「くっ、もう、イク!!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

二次元ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!